



再魔術化時代の資本と技術 : 「マルクスとウェーバー」からハイデガーへ

山之内, 靖

(Citation)

CDAMS(「市場化社会の法動態学」研究センター) ディスカッションペーパー, 06/11J

(Issue Date)

2006-06

(Resource Type)

technical report

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/80100063>



CDAMS ディスカッションペーパー
06/11J
2006年7月

再魔術化時代の資本と技術：
「マルクスとウェーバー」からハイデガーへ

山之内靖

CDAMS
「市場化社会の法動態学」研究センター

神戸大学大学院法学研究科

第5回 倫理創成研究会 「グローバル化と再魔術化する世界」
2005年7月21日 於 滝川記念学術交流記念館2階 大会議室

司会（山本）：

「本日のシンポジウム、『グローバル化と再魔術化する世界』を始めたいと思います。このシンポジウムは、神戸大学大学院文化科学研究科倫理創成論講座の主催、かつ神戸大学法学部 COE の共催です。

山之内靖先生は、東京外国語大学・大学院地域文化研究科を担当されたのち、フェリス女学院大学大学院教授を務められ、現在はフェリス女学院大学の名誉教授でいらっしゃいます。

「山之内でございます。お手元に配布させていただいているレジュメに即して話を進めていきたいと思っております。テーマは、大きく分けて三つであります。第一番目は、戦後60年の経過を経た後の現代社会の出現ということ。これは「未来からの警告」というタイトルで問題提起したいと思っております。そして、第二番目は、戦後日本の社会科学のなかでも、その最も大きな柱となってきた「マルクスとヴェーバー」について、それがいま、どうなっているかと言う点です。マルクスとヴェーバーは、わたくしにとって社会科学における二大巨人でありましたが、そのマルクスとヴェーバーにしても、彼らが提起した発想の枠組は、グローバル化と言われている現代社会を読み解いていく場合、すでに様々な限界に行き当たっていることは事実であります。そうした限界点を明らかにしながら、しかし同時に、これまで読まれてこなかったような脈絡がマルクスやヴェーバーのなかにも含まれているのではないかと、ということを考えてみたい。そういう読み直しが必要なのではないかと。しかし、これは決して容易な仕事ではありません。いったい、そのような根本的な読み直しは、どうすれば可能であろうか。これが第二番目の問題であります。わたくしがいま考えておりますのは、マルティン・ハイデガーの存在です。「マルクスとヴェーバー」という社会科学上の巨大な問題提起者を、こんにち、これまで我々が読み落としてきたような脈絡から問い直そうという場合に、その手がかりとして、意外なことにハイデガーという人物が浮かんでくるのではないかと。そういう点を第二番目に取り上げてみたいと思っております。

じつはそうした「未来からの警告」というテーマ、あるいは「マルクスとヴェーバー」の新しい脈絡を、ハイデガーとの関連を通して捉えなおしてみようとする試みをめぐって私が考えております場合に、第三のセクションをとおして考えてみようとするテーマ、つまり、JR福知山線の事故をどう捉えるべきか、というまだ生々しい記憶と絡む問題が浮かんでまいります。JRの事故はわたくしどもの記憶にもまだひじょうに強くインプットされているわけでありまして、考えてみると、この神戸大学の周辺にお住みの方々というのは、この事故の衝撃をひじょうに強く受け止められた地域でもあるということを感じながら、お話をさせていただくわけでありまして。

まず、わたくしの研究者としての出発点に遡ってお話させていただきたいと思っております。わたくしが大学院を終わってようやく就職口を得ましたのは東京外

国語大学で、若い講師になって、さあこれから授業をしなければならん、ということになりました。西洋経済史という講義を担当しろということで採用されたわけでありましてけれど、いざ授業をしなければならぬという立場に立って、講義ノートを作ろうとして、はたと行き詰まってしまいました。自分が本当に喋りたいことがなんなのか、ということがわからなくて、困ったということが事実でありました。

ここにずいぶん若い方々がお見えでありますけども、わたくしはいま七〇歳をちょっと過ぎて、定年退職の時期にも入りまして振り返って思うのですけれど、大学院で修士論文やドクター論文を書くというのはとてもたいへんなことです。一生懸命書いて、その時代の状況や、学問の状況が要求するテーマに取り組む。必死になって内外の研究状況を見極める。自ら調査研究に参加しながら、一生懸命書くとお思います。ところがわたくし自身があまり出来のいい研究者ではなかったということがある、それが一番大きいと思うのですが、しかし、わたくし個人の体験からしますと、修士論文やドクター論文が書き終わり、ようやく一人前の研究者になったとして、幸いにも就職したという途端に、そのとき自分がどういうかたちで次の世代の若い人たちに、講義を組み立ててお話しするかという事で、迷いにぶつかった。これは多かれ少なかれそうだろうと思います。わたくしの場合はとくにそれがひどかった、という事を告白するところからはじめたい。

わたくしは授業を持ってと言われて、じつは本当に困った。自分がドクター論文として書いたもの、それは幸いなことにまもなく出版することができまして、『イギリス産業革命の史的分析』という本が1966年に出版された。それをそのまま教科書として使ってもよかったんだらうと思います。使ってもよかったはずだったのに、私はどういうわけかその本を、以後ほとんど、10年間、開けて見ることをしませんでした。なにかが私の心の中で不満足だった。どこかで、いちおう学会が認めるようなものを書いたのに、つまづきを感じさせるものがある。もしここで出席なさっている若い方で、私に似たようなつまづきをお持ちの方がいらっしゃいましたら、すこしご参考になるかと思えます。そういうことがじっさいにあるんです。いちおう立派と思えるような修士論文、ドクター論文を書いて、出版した途端にそれを見るのもいやになるというような場合がありうる。そういうときにわたくしはどうしたか。

わたくしは1962年に就職いたしました。研究者としてのわたしにとって、その二年後の1964年という年が重要な年で、これが「マックス・ヴェーバー・シンポジウム」の年でした。マックス・ヴェーバーという人は1864年の生まれでしたから、1964年が生誕100年で、ドイツのハイデルベルクで「マックス・ヴェーバー・シンポジウム」が行なわれました。そうそうたる人々がそこに出席し、実に意義深い講演をしています。タルコット・パーソンズもおりましたし、マルクーゼもおりました。フランスからはレイモン・アロンが出席しています。まだ若手だったハーバマスやモムゼンも発言しています。そうした、そうそうたる欧米の社会学者たちが集まって、マックス・ヴェーバーの業績について、ひじょうに高い角度から集団的に議論をいたしました。そして、世界でその年、「マックス・ヴェーバー・シンポジウム」をしたのはもうひとつだけだったということなのだろうと思いますが、東京大学をベースにいたしまして、日

本中のヴェーバー研究者たちが集まって、これまたひじょうに充実した、「マックス・ヴェーバー生誕 100 年記念シンポジウム」というのが 64 年に行なわれました。この双方ともがもちろん出版されましたし、それから、ハイデルベルクの、ドイツ語、あるいは英語で行なわれた版は、これは全文日本語訳となりまして、まもなく刊行されました。

わたくしは、ドクター論文となった自分の研究をそのまま出版してもらおうという、外見的にはとても幸せなスタートを切ったのですが、さきほど申しますように、それを読み返す気にもなれないという、どういうわけかわからない心の中の空白に直面しておりました。ちょうどそのときに、ドイツと日本での「マックス・ヴェーバー・シンポジウム」が行われたわけで、とにかくそれを何度も読み返してみるという作業からはじめるほかはなかったのです。そのときに、これは不思議だ、と思ったことが一つありました。というのも、カール・レーヴィットがハイデルベルグのシンポジウムに出席していないということでした。カール・レーヴィットは研究者としては非常に苦しい経歴を持った人です。母親がユダヤ系であったために、ナチス・ドイツから追われることになったからです。しかし、ひじょうに優れた研究者であって、ハイデガーの直弟子といえますか、若きハイデガーの、まあ年若い同僚とっていいような研究者でありました。若きハイデガーのところに彼は出かけて、ハイデガーのもとで研究活動を開始したわけです。しかし、彼は、ドイツの大学からイタリアに留学しているさなかに、ナチスが政権をとってしまい、ドイツの大学でのポジションについて、一切の希望を失ってしまいました。そして、これはまた不思議な縁なのですけれども、日本の東北大学に職を得てやってまいりました。その関係があって、日本では、東北大学の柴田治三郎さんを中心とした方々が、第二次大戦後になって、カール・レーヴィットの諸著作を、次々と日本語に翻訳するということになりました。わたしは、その恩恵をおおいに活用し、自分の励みにしていったのです。

わたくしはレーヴィットの原書と翻訳書とをできるかぎり手元に集めて、一生懸命、読みました。そのなかでも、1932 年に、つまりハイデガーがフライブルク大学総長としてナチスにコミットする、あの悪名高き演説をする一年前に、『マックス・ヴェーバーとカール・マルクス』という、素晴らしい論文を書きました。このレーヴィットの『ヴェーバーとマルクス』がわたくしにとって、ともかくも、自分の出発点をもう一度構築するための手がかりであると思えたわけでありまして。で、以後、このレーヴィットを通して、ハイデガーという人物についても理解しておりました。つまり、ハイデガーのオリジナルについてはほとんど関心を持つことがないままに、じつは昨年まで過ごしておりました。うかつなことに昨年まで、わたくしはそういう状態のまま、過ごしておりました。

そして、昨年 11 月に、わたくしの『受苦者のまなざし 初期マルクス再興』という本を青土社という本屋さんから出しました。なぜ青土社から出たかと申しますと、青土社の出している、皆さんもご承知でしょうが、『現代思想』という雑誌がありまして、この『現代思想』という雑誌に、1976 年から 78 年にかけて、十何回かに分けて、「初期マルクスの市民社会像」という論文を連載しておりました。

ご存知のように、若い頃のマルクスは彼の活動の出発点として青年ヘーゲル派とかヘーゲル左派とか言われている人のグループを選んでおりました。このグループのなかで活動するうちに、マルクスは次第に経済学研究に専念していった。当時ドイツで活動していた青年ヘーゲル派のなかでは、カントやヘーゲルによるドイツ哲学の伝統に寄りながら、しかし、そのドイツ哲学、とりわけヘーゲル哲学とどのように対決して行くかが中心問題でした。しかし、マルクスは、やがて、自分の出身母体である青年ヘーゲル派、ヘーゲル左派にたいして決別宣言をすることとなります。その決別宣言としてもっとも名高いものが『ドイツ・イデオロギー』という著作だと思いますが、これは1846年にできております。けれども、そのまえ、1844年に、まだ青年ヘーゲル派のなかに対立を深めながらも所属していると彼が意識していたでしょう、その頃に書いた走り書きに、有名な『経済学・哲学草稿』という文献があります。わたくしが若い研究者だった頃、つまり、1950年代から60年代にかけて、世界的に『経済学・哲学草稿』が話題とされ、熱い議論が交わされておりました。とりわけ第一草稿に「疎外された労働」という名前がついた論文が載っている。これは、その当時、『資本論』と並び称されるほど重要な文献だとされておりました。とにかく、『経済学・哲学草稿』というのは、高く評価され、当時の哲学や社会科学の必読文献として広く読まれておりました。

ところで、この『経済学・哲学草稿』が最初に印刷に付されて発表されたのが、じつは、ちょうど1932年のことでありました。ここから判りますように、カール・レーヴィットの『ヴェーバーとマルクス』というあの素晴らしい著作は、じつは『経済学・哲学草稿』を読まないで書かれたのです。読まないでいるんですが、「疎外」という問題こそ若きマルクスの中心テーマであったということを、『経済学・哲学草稿』のすぐあとに書かれた文献、つまり、1844年の暮れ頃にエンゲルスと一緒に書いた『聖家族』という著作がありますが、それを手がかりとして、カール・レーヴィットは「疎外」という問題こそがマルクスの出発点であったということを見抜いていた。

彼が『ヴェーバーとマルクス』を発表した同じ年に、『経哲草稿』が印刷され、公刊されたのですが、レーヴィットはこれを読む機会をもたないままに『ヴェーバーとマルクス』を発表した。そのことはレーヴィットにとってもかなり気になることだったことは、間違いありません。そう考えたものですから、カール・レーヴィットがその後の生涯を通じて、『経哲草稿』に触れることがあるかと思って、ずいぶん私は探したんです。ところが、レーヴィットという人物は、すごく頑固者なんでしょうね。以後いちども触れていないと思います。つまり、自分はもう『ヴェーバーとマルクス』で、そのときに言おうとしたテーマについては全力をあげて書いたんだと。その後、自分が読めなかった資料が復刻されたけれど、今更読み直すなどということは、そして自分の著作を補足しないし訂正したりするのは、みっともないことだとたぶん思った。それほど誇りの高い人だった。レーヴィットという人の誇りの高さは、彼の文章を読んでみればみるほどどこにでも見つけられる。そして、自分がひじょうに大きな影響を受けたハイデガーは、ナチスに近づいて行って、そしてフライブルク大学総長就任講演で、悪名高い、ナチスに参与するという講演をしてしまいました。

レーヴィットとハイデガーの間のこうした経緯をわたしは承知しておりました。

たので、わたしは長年の間、このレーヴィットを通してしかハイデガーを理解しようとは思わなかったのです。それは、レーヴィットという人物を尊敬しているわたしの、自分なりの礼儀だと思っておりました。ところが、2003年の暮れ頃になって、そうしたわたしに転換を迫る一つの出来事が起こります。というのも、わたしはその頃から、昔書いた連載論文を書き足して、それを書物にまとめる作業に取り掛かろうと考え始めたからです。

わたしは、1976年から78年に、『現代思想』に書いた初期マルクス論を、いよいよ、『現代思想』を出している青土社から本にしませんかと言われて、これはまあ最後の機会となるな、と思いました。これを逃したら、あれだけ長く書いたのが死んだままに終わると思いましたので、昨年4月頃からもういっぺん全部読み直して、書き残していた部分、つまり、『経済学・哲学草稿』の第三草稿の部分を完成させる作業に入ったのです。

この第三草稿について、次の二つの点を挙げておく必要があります。

第一はわたしの作業の進行状況に関することでもあります。わたしが昔取り組んだ「初期マルクスの市民社会像」では、『経済学・哲学草稿』の第一草稿について、例の「疎外された労働」のところまでが書かれておりました。しかし、わたしが最も大事だと思っていた第三草稿にはまだ手が付いていない。

第二には、第三草稿という部分が占める「初期マルクス研究」上の決定的な重要性ということです。というのも、この第三草稿は、第一草稿、そして「疎外された労働」の部分とはその質が大きく変わっているからです。第一草稿を書いた時点では、マルクスが同時に進めていた「経済学ノート」はまだ作成が始まったばかりで、経済学研究はまったく不十分なままでした。しかし、第三草稿を書き始める時点になると、「経済学ノート」はすでに出来上がっておりました。そしてそこには、わたくしが注目した「受苦的存在者としての人間」leidendes-Wesenという言葉がでてきます。英語訳では human suffering などと訳されておりますが、この「受苦的存在者」という言葉、human suffering という言葉は、悪い意味で語ったのではまったくないんです。つまり、人間というのは本来、自然をベースとしている。自然が提供しているもの、地球的自然が提供している生命の、意識なき生命世界のそのうえに労働を加え加工して、それをお互いに消費財として交換しあう。つまり、マルクスは、その後のマルクス、いわゆるマルクス主義経済学といわれているもののなかで常識化されておりましたような、人間がすべての富を労働を通して作り、その人間の労働を通してつくられた富は、だから、労働者の手にすべて還元されるべきである。それを資本家が搾取している。単純に言うとなんという論理の上に「後期マルクス」、『資本論』のマルクスは成り立っているという解釈が一般的であります。そして、『資本論』を読んでいるかぎりでは、どうもそういう読み方しかありえないかのように、読み取れる。当時のわたくしもそうでした。しかし、若い頃のマルクス、26歳頃ですか、そのマルクスは、自然がベースになる、そして自然が生み出した富を人間は労働を通して加工する。この労働生産物が社会的交換の過程に入ってくる。この全過程において、自然がベースになっていることを決して忘れてはならない、と考えた。そのことを自覚する必要性、それが「受苦的存在者」という言葉のなかに集約されていたわけです。

そうだとしますと、1844年の『経済学・哲学草稿』から一年後、45年に『フ

『フォイエルバッハ・テーゼ』が書かれることになり、フォイエルバッハ批判を通して「受苦的存在者」の視点が姿を消してしまったということは、重大な問題だった、ということがお判りでしょう。その「受苦的存在者」という言葉をマルクスに伝えたのはフォイエルバッハでした。例の『キリスト教の本質』を書いたフォイエルバッハであります。その『キリスト教の本質』は1841年に出版されております。1845年の『フォイエルバッハ・テーゼ』は青年ヘーゲル派、ヘーゲル左派からの決別を告げる文献だったのですが、しかし、同時に、フォイエルバッハから継承した「受苦的存在者」の観点も「受動的」でありすぎる、ということで批判されました。そして、この新しい観点を結晶させたもの、それが『ドイツ・イデオロギー』だということです。いったい、この「受苦的存在者」という『経済学・哲学草稿』第三草稿でのキーワード、この言葉は『聖家族』にまでは残っていたのですが、そのわずか一年半だけしかマルクスが語らなかったこの言葉に、いったいどんな意味があるのでしょうか。これがわたくしの問題提起の中心であります。

この若きマルクスの時代背景を考えますと、18世紀の後半から19世紀の初頭までを大きく揺るがしていたヨーロッパ的規模でのロマン主義思想というものがあると思います。それについては、アイザイア・バーリンの『ロマン主義講義』という有名な講義（1965年。邦訳、2000年、岩波書店）があります。じつに見事な講義で、わたくしは感嘆しながら読んでおりますけれど、このバーリンの『ロマン主義講義』のなかで語られているような時代、つまり、産業革命がイギリスを中心として始まり、全ヨーロッパに広がっていく、その大きな技術革命の時代に対抗する思想潮流として、ロマン主義の時代がある。そこにイギリスでいえばワーズワース、ドイツでいえばヘルダーといった人物がリーダーとして現れてきます。

バーリンの著作を読んでいきますと、じつは18世紀の後半から19世紀の初頭にかけて、ヨーロッパ全体に大きな影響力を持ったロマン主義は、やがて1830年頃以降からずっと消えてゆく。そして、産業革命のベースが固まった結果、今度は逆に産業革命が生み出したものを評価する時代が始まる。つまり、進化していく科学と技術の成果のうえにヨーロッパを中心とする世界を構築していく、そういう時代に入っていく。大英帝国というのは、そういう産業革命の成果のうえに世界的な巨大帝国を作ったわけですが、およそ1830年頃からは、ロマン主義は消えていったというわけです。ところが、ロマン主義はもう一度復活する。そのロマン主義が復活したそのときに、それはとりわけドイツのナチズムのなかに取り込まれていき、そしてあのおそろべき全体主義的体制の理想化が始まる。ドイツ民族を支配民族とするところの世界全体の統合支配という覇権主義、全体主義が現われてくる。アイザイア・バーリンは、この逆流をも視野に入れなければならない、というわけです。産業革命という巨大な科学技術革命に対抗する思想潮流として出てきたロマン主義が、それは当時ひじょうに健全な批判精神にもとづいていたが、やがて一世紀も経つと、今度はナチズムを支える思考のなかにも組み込まれていって、民族主義というかたちで再興してくる。そういう巨大な世界史的な問題としてロマン主義思想を位置づけようとする講義であることが読めてまいります。

この巨大な思想潮流のなかで、「初期マルクス」というのはいったいどこに位

置しているのか。それが初期の健全で批判的なロマン主義思想 特にフォイエ
エルバッハのそれ の影響を受けているということはもう明らかだと思いま
すね。しかし、ロマン主義思想の影響を受けているということだけだったら、
こんにち、わたくしどもはそれをもういっぺん読み返して、「受苦的存在者」と
いうわずか一年半の間だけ語った、若きマルクスのこの言葉に意味があるとは
言えないでしょう。しかし、わたくしは、たんにロマン主義に洗脳されて、マ
ルクスが「受苦的存在者」という言葉をフォイエエルバッハから受け取ったとい
うだけに留まらない意味が、ここにはあると思います。といたしますのは、「未
来からの警告」と呼ぶべきモーメントがそこには含まれていると思うからです。
おそらくこれから 21 世紀にかけて、わたくしどもが歴史認識のひとつの軸に
しなければならないモーメント、それが「未来からの警告」というテーマだと
考えるのですが、「受苦的存在者」というフォイエエルバッハ由来のテーマは、す
でにこの「警告」を含んでいたのだと、わたくしは考えております。

そこで、すこしテーマを移していきたいのですが、わたくしは NHK のわり
とファンでありまして、NHK の「世界ドキュメンタリー」などは欠かさず見
ております。そして、ビデオにとったりもしておりますが、ついこの間、「汚
染される北極圏」という映像がありました。あるいはここでも、ご覧になった方
がいらっしゃると思います。こんにちの地球環境問題というのは誰しもが深刻
な問題として考えているわけでありましてけれど、この「汚染される北極圏」を
見てあらためて衝撃を受けました。伊豫谷さんもおっしゃいましたけれど、ど
こかに悪い権力者がいて、その権力者が地球を支配している。その権力者対
して対抗しようというような議論では、もはや我々は批判の学を構築し得ない。
まさにそうなんです。

「汚染される北極圏」のメッセージはこうです。デンマークの、あるいはド
イツの医学者たち、政治学者たちが、先進社会における環境汚染の結果として、
人体の血液のなかに汚染物質が蓄積されることになる。そのことを科学的に検
証しようということになった。そこで彼らは、当然のこととして、血液中の汚
染物質濃度が最も高いのは工業圏の中心であるドイツやデンマークであろうと
予測した。そこで何人かの人から採血をして、検査をして、汚染の度合いを知
ろうとした。そしてさらに、もっとも工業地域から外れていると思われる、グ
リーンランドの周辺の離れたところに住むイヌイットの人たちを比較研究の対
象として検査することにした。それで調べてみたところ、驚くべき事態が見出
された。これはじつはまったく予想されていなかったんですね。汚染の度合い
が低いだらうと思って比較してみたところ、驚くなかれ、グリーンランド周辺
の島で生活しているイヌイットの人たち、しかも彼らは農耕さえしてません。
狩猟採集生活ですね。農耕以前です。だから農薬を畑に撒くことすらしたこと
がない。狩猟採集生活を何千年とやってきているような人たち、そしていまだ
にそういう生活をしている、そういう人たちの血液や母乳のなかに、明らかに
危険水準を遥かに超える汚染が見出された。そういう衝撃的な映像が紹介され
ていました。イヌイットの地域の母親たちは、自分の母乳がそんな危険な物質
を含んでいるなんてことは露知らずに、子供にお乳を飲ませている。それが健
康をひじょうに脅かしていることは事実である。

なぜそうなっているかといいますと、食物連鎖の結果なのですね。これも衝

撃的でした。つまり、ヨーロッパとかアジアとかの産業化している地域から、近隣地域へ流れていく空気中の汚染物質は、ほとんど危険性がない、問題にならないほどの低いものなんです。けれども、それが海の中に降り注ぎ、そこで植物プランクトンによって吸収されると、事態は一挙に変化する。汚染物質はいっきょに数百倍とかになるんだそうです。この植物プランクトンを動物プランクトンが食べると、これまた何百倍になる。すると何百倍がまた何百倍ですから、何万倍になっちゃう。その動物プランクトンを魚が食べる。そうすると、これがまた何百倍になる。もう数えられないほど濃度が上がる。それをアザラシが食べる。すると、アザラシがまた何百倍になる。そのアザラシをシロクマが食べるんです。すると、シロクマの体内に、特に肝臓などには、恐るべきほど濃度が高まった汚染物質が蓄積されていく。実際、その調査で明らかになったのは、このグリーンランド周辺の北極圏に住むシロクマたちは、次々と病にかかって倒れていく。明らかに、種の絶滅に瀕しているというのです。そして、グリーンランド周辺のイヌイットの人たちは、そのシロクマを捕らえてシロクマの肉や肝臓を食べている。これが日常食だと。そうすると、そのグリーンランド周辺のイヌイットの方は自分たちが排出した文明的汚染とはまったく関係がない。数千年来、同じような狩猟生活をしているだけなのに、その人たちのところに、ヨーロッパに住んでいるデンマーク人やドイツ人では考えられないような、高度に濃縮した汚染物質が体内に蓄積されて、危険な生活をしている。そういう映像、これは6月18日のことでありました。この事実は、いったい、どう考えるべきか。わたくしはそのときにこう思った。これについて誰に責任があるのか。誰か特定の人ということはおそらく不可能で、文明圏で生活しているわたしにも責任がある、とやっぱり思わざるをえない。そういうことです。

それからもうひとつデータをあげたいんですが、朝日新聞の6月16日、「汚染される北極圏」が放映される二日前ですね。「戦後60年の透視図・イメージ空間 博覧会」というひじょうに刺激的なテーマを語ったコラムが載りました。文化欄でいつも新鮮な問題提起をする清水克雄さんという朝日新聞の編集者がいますが、彼が沖縄大学の多田さんという人、それに、わたくしの研究仲間である成田さんを取材しながら書いておられる。それによると、沖縄では、皆さんもご存知のとおり「海洋博」が行なわれた。これが1973年です。日本の万国博覧会の歴史を振り返ってみると、まず1970年に「大阪万博」、それから1975年の「沖縄海洋博」、ついで1985年には「つくば科学博」、それでいま2005年に「愛知万博」となっていますが、この清水さんの論説のなかで最も注目されるのは多田さんの発言です。多田さんは沖縄から発言しておられるんですが、沖縄というのは、日本のあの第二次大戦において、唯一、本格的な地上戦が行なわれたところの、日本人の住んでいた居住地です。あそこでいかに激しい、悲惨な戦闘が行なわれたかということは、わたくし、まだ当時少年でありましたけれど、記事で見ました。読んでひじょうに心を痛めたのを今でも覚えております。じつは、沖縄の防衛に当たっていた司令長官の牛島さんという人は、わたくしの遠い親戚でもありました。そういうこともあって、わたくしの頭にひじょうに強く焼きついておりますけれど、その沖縄は、その後本土が独立したにも関わらず、ずっとアメリカの占領下にあった。そして、沖縄の基地問題というのは、これはわたくしどもが学生時代、60年代の安保とか、そ

の後 70 年代の大学紛争のあたりでも、ひじょうに大きなテーマとして、若者たちの心の中にあっただけでした。

この沖縄について多田さんが仰るのはこういうことです。「沖縄海洋博」を通して、戦いの跡であり、慰霊の場所であり、また基地の島でもあるという沖縄のイメージが、「青い海とリゾートの島」というイメージに、一挙に切り替えられた。つまり、過去の悲惨な戦争、そしてそれに続く占領というもののもつ、痛ましい歴史の記憶が、「沖縄万博」というたったひとつの催しを通して、一挙に軸が回転してしまった。訴えても訴えても、一般の人たちに、戦後の沖縄のあり方を理解してもらうことは出来なくなった。特に本土の人たちにとると、これであらう終わったと思わせる効果があった。

万博というのは、たえず時代の先端を行くような、いろんな文化 フィロソフィーとしての文化とかあるいは最先端の技術 を展示している。しかし、この朝日の記事に載っていますけれども、万博というのは、どの万博においても絶対に展示しないものがある。それは戦争の悲惨な歴史、悲惨な災害そのものは決して展示しない。それは広島とか長崎に行って、そういう特殊な記念館に行かないと見られない。万博でそういうものを展示することは絶対にしない。万博というのはなにをするかという、要するに、「青い海とリゾートの島」というふうに、意識を切り替えてしまう。成田さんがそれを受けて言ってるんですけど、日本ほど万博というのを繰り返し繰り返しやった国は、他にはない。そして、万博を繰り返し繰り返しやっているうちに日本の社会はどうなっていたか。万博はいまや、何十年かにいっぺん行なわれるひじょうに稀な事業ではなくなって、この間やっていたのに、またやっているとものになる。こうして、万博で先端的に提示されているようなものをわたくしたちはいつのまにか、日常生活そのもののなかに映して見ている。いつのまにか、「日常生活自体が万博化」している。

じつは、「愛知万博」というのは、これまでの万博のそういうありようにたいする反省というモーメントを組み込むべきだ、という声に支えられて始まったものでした。そうであるからこそ、環境問題をテーマとする万博になったはずでありました。そして、その「愛知万博」について、わたくしどもの研究会にも参加してくださった吉見俊哉さんが、『万博幻想』(2005年、ちくま新書)というひじょうに優れた本を發表されています。私は今でも大学院をひとコマだけ持っておりますけれども、そのクラスで『万博幻想』と一緒に読みました。ひじょうに議論が活発に交わされました。素晴らしい、考えさせる著作であったと思います。

ようやく「再魔術化時代の資本と技術」というわたしの今日の課題に到達できたように思います。2004年の3月に、成田さん伊豫谷さんが編集してくださって、私は御茶の水書房から『対談集・再魔術化する世界』を刊行いたしました。この本の第二部で三人が一緒になって、「場所の再定義をめぐって」という題で、長い、五時間以上にわたる議論をして、それを再録させていただきましたけれども、あの「再魔術化する世界」というテーマで語りかけたのは、この記事の中で成田さんが今の時代にぴったりするような表現を与えてくださった事態のことであると思います。要するに「日常生活そのもの万博化」という事態とその問題性ということです。私たちはいまでは、日常生活に次々となに

か珍しいものがないかということに期待すること自体が当たり前になった感覚のなかで生きている。

「初期マルクス」の第三草稿に見られる「受苦的存在者としての人間」という問題提起の核心にあったのは、いったい、どういう批判意識だったのか。それは、科学技術の高度化が日常化しつつある新しい文明生活の出発点にあって、どんな問題が未来に起こるかという予感であり、また、警告であった。そういった未来を見通したうえで、科学技術の高度化そのものを経済学という科学の名において正当化する世界像、マルクスはそうした世界像を当時のイギリス経済学の中に発見しました。青年ヘーゲル派の連中は、ドイツ哲学を軸にしながら、ドイツ哲学の高みに立ってイギリスともフランスとも違うドイツの文化的知性の高さを拠点としたのであり、そこから批判的な哲学の構築が可能となると考えていた。そうした「ドイツ・イデオロギー」と決別しようというのが、この『経哲草稿』の時期のマルクスでした。経済学のノートを一生懸命作りながら、第一草稿も第三草稿も書いてるんですね。ところが、第一草稿のところで「疎外された労働」を展開したのですが、明らかに行き詰ったと思うのです。マルクスはそこで、行き詰まりを感じて、さらに経済学の勉強を重ね、スミスやリカード、あるいはジェームズ・ミル等をきちっと研究して、青年ヘーゲル派系のドイツ哲学では駄目だと悟った。イギリス経済学を、新しい時代を分析する科学として、いったんきちっと吸収しなきゃならないと決意したと思います。その成果が第三草稿です。この第三草稿には、「ドイツ・イデオロギー」から決別し、水準の高いイギリス経済学をきちっと組み入れる、という観点が表に現れています。しかし、問題はそこで終わるのではないということも、しっかりと自覚されている。その科学としてのイギリスの経済学をさらにどう超えるか。このことが、すでに『経済学・哲学草稿』第三草稿ではっきり課題として意識されています。これが後に『資本論』まで行き着くための出発点だったことは明らかです。

しかし、問題は、第三草稿でマルクスが「受苦的存在者としての人間」と言っていたそのテーマが、一年後に消えてしまったということですね。そこで、時間の都合で、以下、簡単に進めていかざるをえませんが、ハイデガーの問題が浮上してきます。すでにお話していましたが、わたしはカール・レーヴィットに心酔していたために、ハイデガーはいわば視野の外においでしました。しかし、わたくしは、第三草稿を整理する過程で、ハイデガーの『ヒューマニズムについて』という、1947年に刊行された文献に出会うこととなりました。これは、ドイツ敗戦直後に書かれた書簡にもとづく論文です。当時ハイデガーはぴりぴりとした意識の中で過していたに違いありません。ある研究書のなかでは、自殺を考えざるを得ない状況であったということでした。たとえ、裁判所に引き立てられて牢屋に放り込まれることがなかったとしても、哲学者として、ナチスにコミットした自分を、ヨーロッパ中が、とくに戦勝国がどう見ているか、すごく気になっていたはずで、それが46年です。その46年に、じつは、ハイデガーにとっては意外であると同時にひじょうに喜ばしかったと思うんですけど、フランスの、ドイツに対する地下運動のリーダーだったという一人の人物、ジャン・ポーフレという人から手紙がきました。ポーフレは、自分是对独抵抗運動に加わった人間だが、哲学者としてのあなたにはひじょう

に敬意を持っている。あなたは戦争が終わった今、かつての『存在と時間』（1927年）の主題をどのように考えているかという趣旨の手紙でした。そのボーフレさんの手紙に接して、ハイデガーはおそらく救われたように思った。そして、すぐに長々とした返事を書きましたのが、有名なあの『ヒューマニズムについて』という本の素材となった書簡です。

ここでハイデガーは、自分はヒューマニズムという立場、だから人権とか民主主義とかいった近代社会の主題を、簡単には承認しない。自分はヒューマニズムに反対ではないけれど、しかし、ヒューマニズムとか人権とか民主主義を掲げることによって、現代文明が背負う根本問題が解決されるとは思わない、というのです。世界はいま、ナチスに対して、ヒューマニズムや人権の名において勝利したということで沸きかえっている。その最中に、ハイデガーはヒューマニズムとか人権とか民主主義という言葉に安易に同調はできないと言い張ります。なぜかといえば、ヒューマニズムとか人権とか、そういう近代啓蒙主義の発想は、その背後に、科学とりわけ技術と結びついて、物質的豊かさの果てしない前進を進歩とみなす技術主義信仰を抱えているからである。簡単に言うとそういうことを考えているということですね。

ハイデガーのこの発言は、彼自身が極めて厳しい状況の中に置かれていた最中での 実際、彼は当時、占領行政のもとで大学での講義を禁止されてい ました ものだった。そして、かつてハイデガーの下で研究生活を送った経験のあるサルトルが、『実存主義とはヒューマニズムである』というタイトルの論考をフランスですでに発表していたわけですから、サルトルとの対決という姿勢を表明するという点でも、厳しい論争状況を覚悟しなければならないものでした。

ハイデガーの『ヒューマニズムについて』との関連で、レジユメに挙げておいたジョージ・カテブという人の論文にちょっと言及しておきましょう。1997年秋の *Social Research* という雑誌に、ジョージ・カテブが *Technology and Philosophy* という題で論文を書いています。このカテブの論文は、当時一般的だったハイデガー理解とはかなり、というか、まったく異なった文脈で書かれております。というのも、1989年に、ファリアスという人が『ハイデガーとナチズム』という本を書きまして、これが全ヨーロッパに広まる「ハイデガー論争」Heidegger Controversyを巻き起こしました。ファリアスによれば、ハイデガーは、終始、ナチだった。第二次大戦が終わった後でも、ハイデガー哲学の根底はナチズムだった、ということになります。事実、彼は民主主義を肯定しないだろう、人権を肯定しないだろう、ヒューマニズムを肯定しないだろう、というふうに、『ヒューマニズム書簡』も、そうしたハイデガー批判の脈絡で語られているわけです。

しかし、「ハイデガー論争」が華々しく行なわれたのは、ファリアスの本の出版以後、ほぼ1995年まででした。それ以後、どうも論調が変わったように私には思えます。わたくしは、いま、ハイデガーの技術をめぐる問題提起を通して、現代社会論を考えているのですが、その手がかりとして、アメリカで開発されたプロククエスト(Proquest)という学術論文検索データの技術を利用させてもらっています。皆さんご存知でしょうか。英語圏の学術論文について、ほぼ1990年以降のデータを、驚くほど網羅的に整理してくれている。著者名と

か雑誌とか簡単な要約とか、ときには重要な論文ですとフルテキストが載っています。本当に便利で、ありがたい。わたくしは、今年の春に図書館の職員に教えられて、プロクエストを利用し始めました。例えばカール・マルクスで検索しますと、すぐに400点ないし500点の研究論文が出てきます。最新のものから順番に出てくるので、現在、最先端のところではどんな議論がなされているかが、手に取るように判ります。マックス・ヴェーバーで検索しても、ほぼ、同様の数の研究論文がでてきます。ところが、ハイデガーで検索すると、マルクスやヴェーバーの場合を数段上回る数の論文がでてきます。現在、アメリカを中心とする人文科学、社会科学の領域で、ハイデガーへの関心が非常に高まってきたことが、この状況から実感できます。もっとも、ハイデガーの現代「技術」社会批判の論点に即して学術論文を探すというわたくしが、最先端の学術論文検索「技術」を利用するというのは、皮肉なことです。ここにも、現代文明の逆説的状况が現れているのです。

どうも1995年あたりを境にして、ファリアスが提起した「ハイデガーとナチズム」の論点は、もうほとんど問題にもされなくなってきている。そうではなくて、「後期ハイデガー」は、「哲学への寄与」を執筆した1936年あたりから、科学技術の発展の行き着く果てに、近代文明社会はどうなっていくのかを考え始めている。人間は、Sein(Being)、つまり本源的な「存在」ないし自然からますますかけ離れてゆき、破滅的状态を引き起こすに違いない。そういう終末論的発想に、ハイデガーはだんだん引き入れられていきます。カテブは、そのハイデガーの背後にはニーチェがいたと考えている。事実、その頃からハイデガーはニーチェを一生懸命読んで、歴大な研究ノートを作っている。カテブの見るところでは、そのニーチェをヨーロッパの社会科学に導入した第一の人物はマックス・ヴェーバーであった。この系譜としては、ヴェーバー、ハイデガー、そしてハンナ・アーレントの三者がいるとカテブはいいます。ご承知のように、ハンナ・アーレントはハイデガーの弟子であり、愛人であった人ですね。近代技術主義批判の系譜としてはこの三人を取り上げながら、しかし、カテブによれば、マルクスはそれとは違うといいます。というのも、マルクスという人は、科学技術の進歩に疑問を投げかけた人ではなくて、科学技術が呼び起こしていく進歩の方向の延長上に、人類の新しい可能性もたらされると考えていた。しかし、環境問題の深刻化がしめしているように、このマルクスの考え方はもはや通用しない、というのがカテブの問題提起です。

このカテブの議論は非常に面白い。ここには確かに重要な問題提起がある。けれども、カテブがある一点で決定的な読み落としをしているのも事実ですね。というのは、ほかならぬハイデガーが『ヒューマニズム書簡』のなかで、明らかに『経済学・哲学草稿』を念頭に置きながら、マルクスの「疎外論」は素晴らしい、と述べているからです。自分がこの『ヒューマニズム書簡』のなかで語った「故郷喪失」とか「存在忘却」とか「世界内存在」とか、そういうテーマのセットは、すでにマルクスの「疎外論」のなかに入っているとはっきり書いてあります。

となると、カテブがマルクスは駄目であって、ヴェーバー、ハイデガー、ハンナ・アーレントがいいと言っているこの分類は、明らかにハイデガーの趣旨には沿わない。ハイデガー自身が、マルクスを沢山読んだとはとても思えない。

とくに、一般にはマルクスといえば皆が思い浮かべる「後期マルクス」の代表作『資本論』について、ほとんど何も知らないようです。しかし、ともかく『経済学・哲学草稿』は読んでいた。そしてそのなかに「受苦的存在者としての人間」という論点を見つけて、そこに、自分の考えと非常に近いものがあると考えたことは確かです。

ところで、『ヒューマニズム書簡』は、『経哲草稿』のどこを読んで感心したのかは明記していません。第一草稿を読んだとか、第三草稿を読んだとか、あるいはマルクスは「受苦的存在者としての人間」という発想をもっている、という指摘をしている訳ではありません。けれど、わたしは確信しています。ハイデガーは『経哲』の第一草稿を読んで感心するはずがない。第三草稿に出てくる「受苦的存在者」という論点を見つけてびっくりした。そのことは間違いないでしょう。

わたしのそうした確信は、現在英語圏で高まっている「後期ハイデガー」への驚くばかりの関心と照らし合わせても、間違いないことだと思います。皆さん、どうぞプロクエストを使ってマルティン・ハイデガーと打ち込んでみてください。すると、わあっと出てきます。2000年以後の諸論文に限って結構です。それだけでも、もう100点近く出てくる。そのなかから、面白そうなものを選んで一・二点をお読みなってください。すると、ファリアスのように「ハイデガーとナチズム」の関連を問いただすというタイプの議論は、ないわけではないけれども、明らかに主流ではなくなっている。ナチズムへのコミットから離れていった「後期ハイデガー」は、自分自身のなかで「転回」(Kehre, turn)を起こしたのだ、という議論が、いま英語圏でさかんになっている。

ドイツ語圏でも、それほどではありませんが、出てきています。ちょうどこの発表のためにわたしが横浜を出発する直前にでしたけれども、ヨハネス・ヴァイスという人が、「ニーチェ、ヴェーバー、ハイデガー」というタイトルをもった論文を書きました。その翻訳が、『未来』という雑誌の7月号に「上」だけ出ています。「下」がどういうかたちで結ばれるのか、これは楽しみにしております。この関連では、さらに、Michael Eldred, *Kapital und Technik. Marx und Heidegger*, 2000; Heinz Dieter Kittsteiner, *Mit Marx für Heidegger, Mit Heidegger für Marx*, 2004.の二冊が注目されますね。

どうも、1970年代から1980年代にかけて、フランスからポストモダニズムの哲学的潮流がでてきて、日本でも大きな影響を及ぼしましたね。このフランス系ポストモダニズムもハイデガーの影響を肯定的に受け容れてきたのですが、そのハイデガー受容は、言語論をめぐるものに限定されてしまった嫌いがあるようです。いま、そのフランス系ポストモダニズムの考え方が修正される時期に来ていると思います。それにたいして、現在、英語圏で中心となっているのは、むしろ、大地に根ざした生のあり方という、エコロジー的関心です。代表的には、ツィンマーマンを挙げるべきでしょう。(Michael Zimmerman, *Heidegger's Confrontation with Modernity. Technology, Politics, Art*, 1990)。

ということでですね、時間を超過いたしまして恐縮ですが、じつはこの問題は、わたしのイメージのなかでは、JR福知山線の事故ともろにつながってくる。つまり、ハイデガーはJR福知山線のような事故が起こることをぼんやりとな

がらイメージしつつ、彼の「後期ハイデガー」における技術批判、科学技術論を展開しているのです。今日のわたくしどもは、もしマルクスを復権することになんらかの意味があるとすれば、『経哲』第三草稿の「受苦的存在者としての人間」というテーマに、もう一度戻って考える必要があります。この論点は「後期マルクス」では消えてしまったわけですがけれども、じつはしかし、ところどころで、消えていた火山が噴火するようにぼっと出てくることがあります。それは例えば『ゴータ綱領批判』(1875年)冒頭の文章によって、はっきりと確認できます。中身はもう立ち入る時間がございませんけれども、そのなかでマルクスは、人間の労働を中心として富の形成を考えるのは社会主義思想ではない、そう考えるのはブルジョワ思想だと言っています。これは大変に重要な論点ですね。この論点からすると、労働価値説はブルジョワ思想だということになります。わたしは長年の間マルクス主義者でしたし、いまでもそうです。けれども、いろいろとマルクス主義系の文献を読んだなかで、『ゴータ綱領批判』を手がかりとして、労働がすべての富を生み出すという発想はブルジョワ思想であって、社会主義思想ではない、ということをはっきり言ったマルクス主義者は、河上肇さんのような例外を除いて、ほとんどいませんでした。あと一冊を挙げるとすれば、ジョン・ベラミー・フォスター『マルクスのエコロジー』(原著、2000年。邦訳、2003年、こぶし書房)が有益です。

人間の労働は、自然という、それに先立つ根源がなければ、それだけではなんの富をももたらさないのだということ、これが本来のマルクスの考え方です。『ゴータ綱領批判』の冒頭の文章は、『経済学・哲学草稿』第三草稿に見られる「受苦的存在者としての人間」というテーマが、決して捨てられてしまったのではないことを示しているのです。かつて、1970年代に、フランスではアルチュセールが、日本では廣松渉が「初期マルクス」からの決別を語って、フランス系ポストモダニズムへの径路を拓いたのですが、いま問われているのは、その決別宣言が余りにも早急であったということであるように思います。「初期マルクス」に見られる「受苦的存在者としての人間」という認識を回復することなしには、マルクス系社会科学の可能性は閉ざされたままとなるでしょう。いや、それだけではなく、およそ、根源的に批判的な社会科学の可能性もまた、閉ざされたままに終わるでしょう。

JR福知山線の事故は、あの若い運転手の単なるミスというものではありません。あれは、自然の成り立ちを十分に考えることもなく、過剰な人口を都市に集中させた近代社会の問題性を暴露した事件です。過密なダイヤを組んで、一人の若者の身体という自然を、その過密ダイヤに合わせて「調教」(フーコー)しようとした現代日本の都市社会そのものについて、その転倒性を顕にした悲劇なのです。